

ブック NOTICE OF BOOK 紹介

司馬遼太郎著 ● 文春文庫全8巻 坂の上の雲

司馬遼太郎の代表作「坂の上の雲」が再び注目されている。NHKもスペシャルドラマ化し、3年にわたり放映を計画、第1部が昨春秋に放送された。物語は、愛媛県松山市に生を受けた3人の人物の生き様を通して、江戸時代から明治時代に代わってまだまだもない、近代国家の仲間入りをしたばかりの、よちよち歩きの日本の姿を描いた歴史小説だ。

司馬遼太郎が40代のほぼすべてを費やして完成させた作品。1968(昭和43)年4月から1972(昭和47)年8月にわたって産経新聞紙上に連載された。松山市に2年前にオープンした坂の上の雲ミュージアムに入ると、3階から4階のスロープの壁一面に新聞に連載された「坂の上の雲」の記事コピーが貼られている。

物語は、正岡子規、秋山好古・真之兄弟の3人の人物を中心に多くの人物を登場させながら、近代国家をめざす明治の日本の姿が描かれている。江戸時代の幕藩体制の時代から、明治維新を迎え、初めての国民意識の中で、一定の資格さえとれば、博士にも教員にも官吏にも軍人にもなることができた時代、正岡子規は新聞記者となり、近代俳句、短歌の革新に力を注ぐ。一方、兄の好古は、フランスに留学、騎兵戦術に

ついて学び、ロシアのコサック兵に対抗できる草創期の騎兵を陸軍で育て、弟の真之は海軍で、世界一を誇るロシアのバルチック艦隊に比する近代戦術の基礎を確立する。三者三様で活動する分野は違うが、近代国家に成り立ての小国日本が、世界有数の軍事大国ロシアに挑む日露戦争が勃発する激動期の日本の姿を世界的なスケールで描いている。

『坂の上の雲』の題名の由来

『坂の上の雲』という題名は、封建の世から目覚めたばかりの日本が、そこを登り詰めてさえ行けば、やがては手が届くと思いがれた欧米的近代国家というものを「坂の上」にたなびく

一筋の雲」に例えたことから来ている。

封建の江戸時代から明治に開国してわずか37年後に、小国日本は、当時世界の軍事大国ロシアと戦わざるを得ない状況に陥った。ロシア帝

国は、日清戦争に勝った日本に対して、三国干渉をテコに圧力を強め、不凍港を求めた「南進」政策の当然の帰結として、次の植民地の的を日本に絞り、虎視眈々とその機会を待っていた。反対に日本は、こういうロシアの意図を肌身で感じつつ、祖国防衛戦争という位置づけのもと、来るべき日露戦争に備えて、国を挙げて準備し、一例を挙げれば当時国家予算の半分以上を軍艦の建造に費やしている。大勝せずとも、負けない準備を着々と行っていった。陸戦、そして海戦両方で、日本はかろうじてロシア軍と戦い勝ちを収めた。しかし、当時の外務省をはじめとした政



写真：右から
●坂の上の雲ミュージアム
●秋山好古展の展示案内
●1296回の新聞連載記事がはりだされた壁面



府、陸海軍のリーダー達の日本国を守ろうとする武士道精神をもとにした比類無き敢闘姿勢、そして内外の情勢を合理的に緻密に分析し、薄氷を踏むような戦略・戦術で大国ロシアに何とか勝ちを収めた、この明治時代の日露戦争での勝利の正確な分析をせずに、第2次大戦に突入し、その結果、日本は敗戦国となってしまった。

しかし、第2次大戦後の日本も、省みれば、「坂の上の雲」をめざして、ひたすら、欧米に追いつき追い越せと駆け上ってきたことは間違いない。この書が、司馬文学の最高傑作と位置づけられるのは、この戦後の日本の姿と、明治維新から開国までもない日本が近代国家をめざしひたぶるに努力し、大国ロシアに勝利する姿と酷似しているせいかもしれない。

「坂の上の雲」の欧米をめざした戦後の日本

第2次大戦後の日本は、国民も、労働組合も、経営者も、政府も、官僚も、国を挙げて欧米並みの賃金、生活をめざし、追いつき追い越せと「猛烈社員」「働き蜂」「会社人間」と外国から批判されながらも、ひたすらに、がむしゃらに働き、戦後の焼け野原からわずか30年余で、世界第2位の経済大国に駆け上った。

バブル経済が崩壊した1990年以降、その日本が自信を失っている。かつて1970年に日本の人口が1億人を突破した40年前頃、「一億総中流社会」と言われ、経営の神様・松下幸之助氏が生前、21世紀中に資金ダムをつくり日本の税金を無税にするという「無税国家論」を提唱した頃の面影は、国の借金が800兆円を越し、非正規労働者等の格差が広がっている今の日本には見えないことは残念なことだ。

江口克彦PHP総合研究所社長は「昔は『アメリカに追いつけ、追い越せ』『社員の給料をヨーロッパ並に』など遠い目標、司馬遼太郎さんの言う『坂の上の雲』を見つめていた。それが、マニフェストや成果主義によって、政治家も経営者も理想なき者たちになってしまったのです。(中略) もう一つ、成果主義と共にアメリカから入ってきた考えに『会社』は株主のものという考えがあります。しかし、これはあくまでアメリカ資本主義の考え方で、日本は日本的株式会社の考えを持たなければいけません。では、日本的株式会社の概念とは何か。それは、『会社は株主のものであり、従業員のものであり、お客様のものであり、世の中のものである』という考え方です。にもかかわらず、多くの経営者が株主第一主義になっている。そして成果が上がっても、自分の給料だけ

上げて従業員は放っておくことになる。本来経営者なら自分の給料を抑えてでも、従業員の給料を上げるものです。それこそが武士道であり、日本人の心だと思えます。日本人には、思いやりや憐れみの心というのが脈々とDNAに流れていると思うのですが、一体いつ頃から経営者が社員のことを考えなくなったのでしょうか」(WILL 2009年5月号掲載)と述べている。

さらに、「いまからやるべきことは、早く現在の問題点に気付いて、『坂の上の雲』を掲げることです。松下幸之助の言葉に『理想を掲げない指導者は、指導者たる資格がない』というものがありません。(中略) 一年一年を見るのも重要ですが、もっと先を見据えないと、大きな仕事はできません。政治家も『坂の上の雲』を掲げ、国民に提示していかなければならない」と述べている。小賢しい、卑小な自分の知識をひけらかし、他者を小馬鹿にすることによって自分を偉く見せようと必死になっている、人の不幸の上に自分の幸せを築くことに何のためらいも見せない日本人が、増えてきたように感じる昨今、今こそ、もう一度、21世紀の日本の『坂の上の雲』をみんなで模索し、考えて、『和をもって尊し』とする世界に誇れる日本を再構築する時だと感じた次第である。(渡辺美知夫・記)